



離れていても あなたのことを 思い出しています



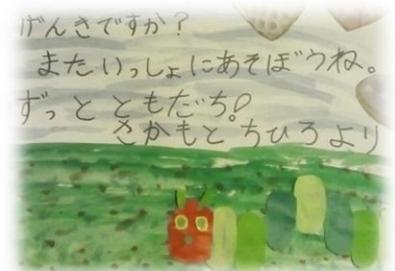
毎日一緒に過ごしていたお昼休みの「すずきの森」。特別支援学校のみんなと、おにごっこしたり、かくれんぼしたり、電車を見ていたり、散歩して歌っていたり。それぞれのペアが、それぞれの時間を過ごしていた大切な場所でした。4月、そこには誰も居ません。新型コロナウイルスの感染予防対策により、わたしたちの交流は、当面停止になってしまいました。3月から始まった臨時休校。その間に特別支援学校では3人の友だちが卒業を迎え、1人の友だちが転校していきました。おめでとうも、ありがとうも言えないままの「別れ」でした。4月9日、明日から再び臨時休校が始まるという日、IK君は次のような日記を綴っていました。

Kに会いたいな。卒業おめでとう。入学おめでとう。本当は直接言いたかったけど、心の中で思っている。春休み中もずっと思った。会ってなくても、相手を思うことはできると気づいたけど、会うのが一番うれしい。最近ずっと会わなくて、Kの今の幸せを願う気持ちはどんどん強くなっていきました。出会ったときはどうなるか分からなかったけど、今では、ずっと心に住んでいる。Kに出会えて良かった。ぼくは胸を張って友だちと言える。Kが大好きだと言える。K、楽しかったな。ありがとう。

学校にも行けず、友だちにも会えず、ずっと家に居る中で、「あなたの今の幸せをずっと願っている」「ずっと心に住んでいる」、そういう自分を知ることができたIK君。じっとしていることなど、できなくなっていきます。

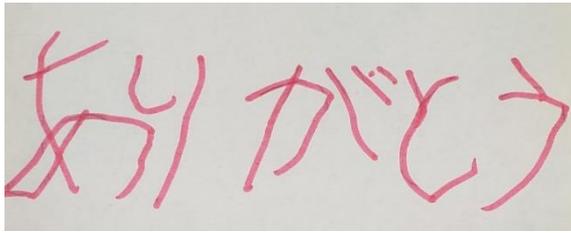
ぼくは、今も忘れていないよ。あなたの中にもわたしがいたら、うれしいな。

休校中、Tさんが連絡をくれました。「ペアのRさんに手紙を書きたいのですが、届けることはできますか」というのです。「もちろんです!」と答えると、早速彼女は手紙を用意しました。R君の大好きな「はらぺこあおむし」の手紙です。絵本のように、遊べるようになっていました。そのTさんの動き出しは、休校中といえども、クラスみんなにつながっていきました。それぞれのオリジナルの手紙でした。



IK君は、迷っていました。伝えたいことはたくさんあるけど、きっとペアのK君はその字を読むことはできないからです。昨年、IK君は、言葉でお話することができないK君と心を通じ合わせることをずっと模索してきました。「直接会ったら、表情や行動でなんとなく気持ちは伝え合えたのに…。どうしよう。」と悩んでいました。しかし、翌日、彼は手紙を持ってきました。まるでラブレターのように愛情がたっぷり詰まった手紙でした。たくさんの言葉が綴られたその手紙の表紙には、「Kのお家の方へ どうしても伝えたいことがあったので手紙を書きました。Kに読んであげてください」とありました。きっと、お家の方はその言葉を声にして読み上げながら、わが子のことを本気で想うIK君の言葉を噛みしめていたのではないかと思います。IK君は、以前こんなことも綴っていました。「うれしいことと幸せなことは違う。何かできることはうれしいけど、それで幸せとは言わない。幸せって、誰かに愛されていること、必要とされていること。そう気づいたら、Kもぼくと変わらないってわかった。みんなみんな、幸せになりたいんだ」。IK君の言う「Kの今の幸せを願う気持ち」とは、今、ここで、ぼくはあなたを必要としているということを伝えることと重なったのかもしれない。

K君からのお返事



お手紙を届けて、役2週間ほどが経ったある日。K君からお返事が届きました。「ありがとう」、震える字をよく見てみると、うっすらと鉛筆の跡が見えました。お母さんが書いてくれた字を、一生懸命なぞったことがうかがえました。

IK君たちはとても心を揺さぶられていました。今まで、直接会っている時には、言葉で交流を交わしたことがなかったからです。今、目の前にあるこの一文字一文字から、K君の想いが伝わってきます。「やっぱり、会えなくたって、交流は続けられるよ。だって、今、ぼくたちはこんなに心を揺さぶられているんだからさ!」、今年の交流の形の一つが見えてきた瞬間でした。

あなたの中にも、今も「わたし」がいたんだね!

休校が明け、感染対策をしながらの学校生活が再開されました。そうはいつても、今までのように直接会いに行くことはできません。ずっとお手紙のやりとりを続けながら、「考えれば考えるほど、また、すずきの森で遊びたいな、直接会いたいなって思っちゃうんだよね」という言葉を何度となく聴いてきました。「あの子の隣に居られないことを受け入れる」というのは、簡単ではありませんでした。



そんなある日、特別支援学校の友だちが、本校の自然体験園に遊びに来るという連絡をもらいました。本校にあるすべり台やブランコに出会いたかったのだそうです。子ども達はそのことを知ると、「会いに行きたい」という想いを吐露していきました。しかし一方で、その願いを叶えることは難しいことも分かっていました。「下に降りていったら、わたしたちもあの子達も遊びたくなっちゃうから、三階からそっと姿だけでも見ていたい」、そんな願いへと言葉をかえていきました。

わたしたちは、声を潜めてそっと見つめていました。あの子達は、今も、あのときと変わらず本当に明るくて、楽しそうで、見ている私たちも元気になっていきました。

そして、特別支援学校に帰る時間です。その時、特別支援学校の先生方が3階に向かって手を振ってくれました。「え、いいのかな、いいのかな!」と興奮しながら手をふり返す子ども達。その時です。Rさんが「あ、Sさんたちだ!!」と大きな声で、私たちの一人の名前を叫んでくれました。「名前よんでくれた!覚えていてくれた!」、Sさんだけではなく、みんなが、本当に喜んでいました。

受け入れるために 動き続ける わたし



「隣に居られないこと今を受け入れる」ということ。それは、納得していくことではなく、もしかしたら、「それでもあなたの隣に居たい」と「あなた」を思い、願い、祈り、藻掻いていくことのような気もします。Aさんは、ペアの子はマスクが苦手ですぐにはずしてしまうことがあると聞くと、何度も自分でマスクをつくってプレゼントしようと動いています。Sさんたちは、「わたしたちが一緒に遊ばなくても、特別支援学級の同じクラスの友だちと、いっぱい楽しんでほしい」と願い、ペアの子が好きなすべり台を手作りで製作しています。試しては改良し、誰でも安全に使えるすべり台を目指しています。



K君は、ニュースで目にした黒人差別のことに問いを抱き、自主学习を進めています。デモのこと、非暴力の「ガンジー」のこと。そして、「キング牧師」のこと。彼は、キング牧師の「わたしには夢がある」の演説を、自分の今と重ねています。そして、ペアの子に、「違いによって生きづらさを感じることがない社会を、同じ未来を生きていける社会を、いっしょにつくっていきましょう!」と、語りかけています。